



なんという世の中になってしまったんだろう。日々の暮らしも医療も経済も7ヶ月前までは予想もしなかった世界の変わりようである。何より、難聴者にとっては家中以外は絶対マスクの日常が厳しい。人工内耳があれば、日常的にそれほど困らなかったのに、たった1枚のマスクで、本当に聞き取れない。いったい、いつまでこんな生活が続くのだろうか。

1年前は週に2日ほどしか空白の日がなかった私のスケジュール、春の自粛期間中は手帳はほぼ真っ白。ずっと家に居たらさぞかしストレスがたまるだろうと思っていたが、高齢になったせいか、意外にステイホームも気にならず、せつせと庭仕事やハゲハゲ状態の貧相な芝生の草抜きに励み、今年のバラは見事な花を咲かせたものだ。夏からは少しずつ習い事やサークル活動も再開して、11月のスケジュール帳はかなり予定が入っている。10月には go to トラベルを使って久しぶりの旅行にも出かけた。しかし、北海道では新型コロナウイルス感染者が増えてきて、これから寒くなるとさらに感染が増え、第三波になると予想されている。熱でも出たらエライこと、うかつに風邪やインフルエンザにも罹れない。

「ジャーナリズムはネガティブなバイアスを作っている。ジャーナリズムは正確な状況を伝えること」インターネットニュースは毎日延々と感染者数をあげ、何日ぶりで200人越えなどとあおる。さすがに、コロナに効くとかのデマ記事はなくなったけれど、地方では感染すると村八分な状況は同じらしい。無症状や軽症者が多くなって、気も緩んでくる。「新型コロナウイルスの危険性を実感させるには統計やデータより有名人が感染するほうが効果的」志村けんさんや岡江久美子さんが亡くなったときの慄きは忘れられないのに。

今、私たちはどうしたらよいのか。ひたすら家でじっとしていればそれでよしというわ

けでもなく、自分さえよければ…の問題でもなく、特にコロナと経済は最優先事項で、先例がないので今も手探りに見える。

コロナというパンデミックに見舞われた世界と日本の未来とありかたを、世界の知識人6人のインタビュー記事をまとめた「コロナ後の世界」を読めば、少しは理解できるかと思っても、やはり悲しいかな、凡人には身の回りのことに気を使うしかないわけで。

コロナ感染以外にもさまざまな問題があるなかで、とりわけ日本が直面するのは人口減、少子高齢化問題である。子どもの数を増やす手立ては全く効果を発していない気がする。その前に結婚しない、結婚できない現状を何とかしないと。ところが、この本では、少子化はそんなに気にすることはない、人口減に対処すればいいのだと。人口に対する資源も少なくて済み、働き手は移民に頼ればいいと言う。ちょっと、目ウロコな考え方です。

高齢化問題も「年寄りと言っているのは八十歳以上のことです…日本は世界各国と比べて健康寿命が非常に長い、長寿をポジティブに捉える」とわりと前向きに書かれている。今のまま食生活や身体に注意を払って少しでも元気を維持していかないと。我が家も夫婦二人暮らし、お互いに年取っていくのだから、不満や文句は抑え気味に、なるべくおだやかに暮らすようにしている。「日本は女性管理職が少ない、男女賃金格差が大きい」息子も娘家族も子どもを抱えて共働きしているので、陰ながら応援するしかないジジババです。

「民主主義の本質は投票すること」アメリカ大統領選開票は先進大国のアメリカとは思えないほどの大混迷であるが、日本の選挙に対する関心の薄さや低い投票率を思えば、選挙であれだけ大騒ぎできる国民性がうらやましい。「[G A F A] IT業界の四強。すなわち Google、Apple、Facebook、Amazon」超のつく企業幹部は自分の子どもに iPad を使わせなかったんだって。自分の頭で考えなきゃ、私も。字も手書きで書いてみよう(笑) 『コロナ後の世界』大野和基 編 文春新書